

福祉系 対人援助職養成の 現場から²⁶

西川 友理

Aさんの興味

専門学校で教員だった頃に、ある授業でちらっと学会の話をしました。

「今海外ではこんな事例があるらしくってね、その話がすごく面白かったんだよ！」

「へー」

授業後、一人の学生Aさんが話しかけてきました。

「先生、学会って面白そうですね！」

「うん、面白かったですよー！」

「私も行ってみたい！」

あっ、と私は一瞬戸惑いました。

他の分野は知りませんが、社会福祉や心理の学会は、当時、専門学校の学生が参加することはあまり一般的ではありませんでした。今でもそうだと私は感じています。

大学院生なら普通に参加されていま

すが、大学の学部生となると、お手伝いのスタッフとして会場に入ることは時々あっても、お金を払って参加していると「へえ！」と驚かれるくらい珍しかったと思います。

ちょうどAさんの興味と合致した学会が、翌月に控えていました。ただ、確かに、内容的にちょっとまだ難しそう…でも、行ってはいけないなんてことはないだろう、と私は考えました

「こんなものがあるんだけど…一緒に行く？」

とチラシを見せると、Aさんは目を輝かせて、言いました。

「行く行く！行ってみたい！」

そこで翌月、私はAさんと共に学会に参加することになりました。

チラシを渡した翌日、Aさんは私に質問に来ました。

「あの一、私いくら払ったらいいんでしょう？」

申し込み時に、学会参加費の振り込みが必要なのですが、チラシの参加費一覧には「大学教員」「一般」「学部生・大学院生」という区分しかありませんでした。そこでAさんに、目の前で学会事務局に電話をかけてもらいました。

「…事務局の方、ビックリされています。『上に聞きますね』って言うてはりませぬ。」

やがて保留音が止み、「学部生と同じでいいですよ」との返事を頂きました。

そして当日、受付の時にAさんが名前を言うと、受付担当のお姉さんは笑顔で、「あー！Aさん！はいはい！専門学校生の！」

とおっしゃいました。いかにも珍しげな扱いです。

「なんか…場違いなんですか、私？」

「そんなことないって！まあ多少珍しがられるやろうけど、大丈夫大丈夫！」と…実は私も「あー、これは不適切な所に連れて来ちゃったかな」と、少し不安になりながら…励ましつつ、参加しました。

最初こそ行動を共にしていたAさんですが、やがて私と別行動をし、自分の興味のある分科会に参加していきました。

一日が終わった帰り道、私はAさんに感想を聞きました。

「うーん、全っ然解らない事もところどころありました。もうみんな、何喋ってるの？っていうくらいの。でも、すっごく面白かった！！あとね、褒められまし

た！専門学校生でこんなところに来てるんだね！って。あー、こういう勉強って、面白いっすねー！」

スキップしかねない勢いで、今日知ったことを嬉しそうに語ってくれました。

お互い、自分が参加していなかった分科会について、色々質問をし、また教え合いをしました。

学ぶ姿勢

この学会の帰り道、Aさんには難しいのではないとか、不適切なのではないかなどと心配していたのは、大変過保護だったよなあと反省しました。難しいとか、どうも合わないといったことは、本人が判断すればいいことです。…と、頭ではわかっているのですが、せめて生まれて初めて出会う学会は「面白かった！」と思えるものであってほしい、と願ってしまい、つついっ要らぬお膳立てを画策してしまっていたのでした。

そもそも、大学生ならば学会のお手伝いをしたり、研究会に参加したりといった機会はあるかもしれませんが、短期大学や専門学校で学ぶ学生の多くは、専門知識を入れるだけで精いっぱいの日々を過ごしています。だからこそ、「学ぶことって面白い」と思える経験をさせたい、と願ってしまったのです。

確かに、Aさんにとっては少し難しい内容だったのかもしれませんが。しかし実際に楽しいと感じたようでしたし、帰り道には私と議論をし、お互い学び合いが出来たのです。これのどこが「不適切な場所」だったと言えるのでしょうか。

このAさんとの経験があつてから、「出会いはご縁の物なのだから、出会って面白いと思えなければ仕方ない。ならば、そういったものに触れるチャンスを、沢山提供しよう」と考えるようになりました。学生に「ちょっと難しそうだから」「学生にはそぐわない場所だから」等という理由で情報を渡さない、という事がなくなりました。多少難しかろうが訳が分からなかろうが、受け取る方が学ぶ姿勢でいるならば、そこから得る物は大変多いと知ったためです。

大体、ちょっと難しいくらいが面白いというのは、私自身が子どもの頃に経験していたのでした。

森毅さんの言葉

中学生になりたての頃の私は、毎週末のように図書館で「ちくま日本文学全集」やら「思潮社現代詩文庫」やらを借りていました。正直言って何を言いたいのか、テーマは何か、わからない文章もたくさんありました。しかし、なにか文章の底にわくわくするもの、根拠はないけれど、次々と新しい世界を見せてくれるものを感じ、

「今の自分を満足させてくれるものはこれだな、だけどこれはなんだろう」

「何言ってるんだかさっぱりわからないけど何かいいんだよな」

と思いながら、次々と乱読していました。

そんな時、雑誌のインタビューで、数学者の森毅さん（故人）が「わかるけどつまらん本より、わからんけど面白い本を読む。その無駄が人を輝かせる」とお

っしゃっているのを拝見しました。

「まさに私がやっていることじゃないか！これって、無駄なことなんだ！しかもいい無駄なんだ！」と衝撃を受けました。

それから幾年月。さてあの頃の本は私を輝かせてくれているのか、どうなのか。

ただ、「無駄な本」を読む数が極端に減った今の方よりも、中学生当時の方が、文章の「正しさ」はわからなくても、「美味しさ」は判断出来ていたように思うのです。

「わからないけど、面白そう」

今の自分より少し高いレベルに、自分を置いてみる。自分の興味のままに、面白いと思う物のあるところに行ってみる。精神的・知的・抽象的においてみるのではなくて、文字通り物理的に、自分をその場に持っていく、その実物に触れてみる。その意味は大変大きいと思います。

解らない、出来ない事があるからこそ、解りたい、出来るようになりたいと手を伸ばしたくなります。「解らない、出来ない」という事があるというのは大変素晴らしいことだと思います。

しかしその一方で、解らないから手を伸ばす気も起きないということもあります。むしろ、こちらのケースの方が多いかもしれません。

同じ「解らない」という状況なのに、何が違うのでしょうか。手を伸ばすには解らない事が多すぎて、諦めてしまうからでしょうか。解らない事をわかるため

の手段がなさすぎるからでしょうか。

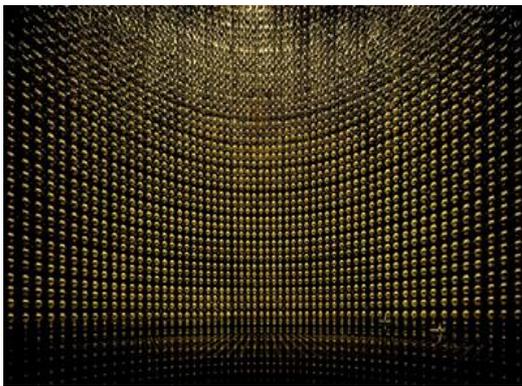
手を伸ばす気が起きるか起きないかの決め手は、大変主観的な言葉ですが、もっと根本的に「面白そうな匂いがする」かどうか、だと思っただけです。「わからないけど、何か面白そう」と思えるかどうかです。

その面白そう、という嗅覚は本来誰もが持っていると思います。

何に対して面白さを感じるのかは人によって違いますが、面白そうと思える気持ちがあると、多少わからない事であっても、理解したくなるのではないかと思うのです。

勉強する意味

勉強する意欲がない、何で勉強せなあかんの？という中学生に、アンドレアス・グルスキーが撮った、スーパーカミオカンデの写真を見せました。



(アンドレアス・グルスキー 《カミオカンデ》2007

C・プリント 228.2×367.2×6.2cm(C) ANDREAS GURSKY / JASPAR, 2013/14 Courtesy SPRÜTH MAGERS BERLIN LONDON)

「…すげー！」

「すげーでしょ！めっちゃ綺麗やよな！この右下見て！このちっちゃいの、ボートやねん！人が乗ってるの！」

「…でけー！」

「でけーよね！これな、写真はアート作品やけど、写ってるのは観測装置やねん！」

そして、私の知っている（と言っても本当にほんの少しですが）カミオカンデやニュートリノに関する知識を、その中学生に話しました。

「ニュートリノっていうちっちゃいのをつかまえるのに、こんなでっかい水槽が要るらしい。」

「神岡町にあるからカミオカンデっていう名前やねんて。」

中学生は「へー！」「ふーん！」と言いながら写真をしげしげ見つめています。

「なんかな、私もよく知らんけれど、こういう面白いのやきれいなのが、世の中にはたくさんあるらしい。「あいうえお」を覚えないとマンガも読めないように、基本となる勉強をしておかないと、そういうのに触れる機会がガクンと減る。勉強するのは、そういう面白いのやきれいなのをたくさん見られるようになるためやと思うよ。」

「ふーん、面白いなー」

「うん、勉強ってわりと面白いねん、多分。」

「出来る」ための勉強と 「わかる」ための勉強

受験を主眼に置いた勉強は「知っている」「覚えている」事をよしとしています。それは、「わからないけど、面白そう」とは全く別次元の話です。「正しい答えを知っている」「正解を答えられる」

つまり、「出来る」ようになるための、訓練のような勉強です。その勉強は「わからないけど面白い」ということを「わかる」ために使う道具のようなものだと思います。「受験勉強なんて意味がない」という批判は良く聞きますが、これは一概にそうも言えないと私は考えています。そこで知ったことは、そのまま「わかる」事に使えるからです。

専門学校や大学、短期大学で卒業研究のサポートをしていると、ある時点までは面倒臭そうだった学生が、ふとした瞬間からめきめきと自分で研究を進めていくようになる、というケースに、今まで何度も出会いました。「好きな事を研究していいよ」と言われても、何をしたらいいんだか…と、手法がわからずに困っていた学生が、調べ物をしている最中に「あれっ」という事実気づき、それを確かめるためにさらに調べ…そうしているうちに、指導した私も全然知らない事実や論文を探し出し、楽しそうに私にプレゼンテーションしてくるのです。

「出来る」ための勉強から、「わかる」ための勉強にシフトすると、こんなに楽しそうに勉強するのか、と目を見張る事がよくあるのです。

わからないけど面白い

ですから私は、授業を構成する時に、「わからないけど面白い」という気持ちを想起させられるようなもの、あるいは授業の環境構成について、よく考えます。その気持ちが持てたら、自分で勝手に成

長したり、探求したりする心の準備は出来たようなものだと思うからです。

その成長や探求は、教員にも刺激を与えます。教員と学生が、お互いの「わからないけど面白い」をやり取りすることで、学びはより一層深くなります。

知ることを欲する、タネと仕掛け

「全ての人間は生まれながらにして知ることを欲する」。これは、10年ほど前にあった某雑学番組（「へえ〜」ボタンがある、あの番組です）のオープニングにも使われた、アリストテレスの『形而上学』の一節です。「知りたい」という気持ちは、どんな人の心にもあります。何がその心を刺激するかはわかりませんが、様々なタネと仕掛けのうちのとえ1つでも、学生の心に触れたらいいなあと思い、ひとりほくそ笑みながら、ああでもないこうでもない授業を作っています。色々ヒネったタネよりも、シンプルなものがずっと響いたり、仕掛けたつもりのないところで激しく反応が返って来ることがあります。私も日々刺激をもらい、学ばせていただいているのです。

冒頭に挙げたAさんは、数年後、大学に編入し、専門職になりました。今でも、さまざまな勉強会やイベントに参加、時には運営側に回って活動もしているようです。

先日久々に会いました。互いに共通する子ども家庭福祉分野について、時間を忘れて話をしたのでした。